

みつばちのきた日

小川未明

青空文庫

雪割草は、ぱつちりと目を開いてみると、びつくりしました。かつて、見たことも、また考えたこともない、温かな室の中であつたからです。そして、自分のまわりには、美しいいろいろの花が、咲き乱れていたからであります。

雪割草は、小さな頭の中で、過去を考えずにはいられませんでした。この雪の降る、風の烈しい、岩蔭で咲いた日のことが、ぼんやりと浮かびました。それは、谷から捲き起こる風の叫びであつたか、また、山を越えて、あちらの海からうめき起こる波の音であつたかしのないが、たえず、すさまじい、魂を戦かせるような響きをきいて、花卉を震わせながら咲いていたのでした。

しかし、その日を不幸だとは考えなかつた。春になると、羽のうす紅い、小さなちようが、たずねてきてくれた。また、夜になると、清らかな星がじつと見守つて、いろいろ不思議な話をしてくれたからであります。

「しかし、いったいここは、どこなんだろう。」と、雪割草は、あたりをながめて、ひとりごとをもらしました。

すると、すぐ、自分の頭の上に、くじやくの羽を垂れたような、貴族的ならんが、だ

らりと舌を出したように、みごとな花をつけていましたが、その言葉をききつけると、

「おまえさんのような田舎者には、ここは、ちとぜいたくすぎるようなところなんだよ。

ここは、人間が金をかけて造っている温室なのさ。わたしはここへきてから二年めになるから、よくこの室の中のは、なんでも知っている。おまえさんだって、山にいてごらんない。どんなに寒いことか。そして、まだなかなか花を咲くところでない。こうしてかわいがられたのも、早くおまえさんに花を咲かして、お客に売るつもりなんだから、これから、おまえさんも、いままでのように、いいことはあるまいよ。」と、らんはいいました。

雪割草は、なるほどそういうらんのようにすを見上げて、美しい姿だと、つくづく感心しました。

「それで、あなたは、どうしてここにきて、二年もおいでなさるのですか？」と、雪割草は、らんに向かって聞きました。

らんは、さもゆつたりとした姿で、おうへいに雪割草を見下ろしながら、

「世界の植物を愛する人たちで、おそらく、わたしを知っていないものはあるまいね。わたしは、南の温かな島の林の中で育ちました。それは、いま思い出しても陽気な、おも

しろいことばかりが目^めに浮^うかんでくるのです。それを一つ一つおまえさんに話^{はな}してあげた
 と思います^{おも}が、わたしは、なんだか、この二、三日^{にち}、体^{からだ}のぐあいがよくないから、いつ
 か気分^{きぶん}のいいときにいたしましょう。なに、体^{からだ}が悪い^{わる}って、寒^{さむ}さがこたえたのですよ。南^{みなみ}
 の方^{ほう}の私^{わたし}の生^うまれた島^{しま}は、いまごろは暑^{あつ}い日^ひがつづくのですから、無理^{むり}はありません。し
 かし、ここにいと、のんきですよ。わたしの大^{だい}きらいな風^{かぜ}も当^あたらないし、人^{にん}間^{げん}が万^ば
 事^じいいようにしてくれま^すからね。しかし、なにしろ高^{こう}価^かなことをいいますから、ちよつ
 とお客^{きやく}がわたしには手^てが出^だせないのです。それで、去^き年^{ねん}は、わたしは、ここに残^{のこ}りまし
 た。今年^{ことし}もどうか。なかなか素^{しろうと}人^{にん}の手^てに渡^{わた}つて、つらいめをさせられるよりか、どれ
 ほどここのほうがいいかしれません。」と、らんは答^{こた}えました。

「それは、そうだ。俺^{われ}なども、去^き年^{ねん}傷^{けが}をしなけりや、とつくにここにはいないのだ。今^こ
 年は傷^{けが}もなかつたし、どこかへゆかなけりやならないかもしれない。そうすりや、また、
 みんなと、こうして顔^{かお}を合^あわすこともないのだ。」といったものがあります。雪^{ゆき}割^{わり}草^{そう}は、
 その声^{こえ}のする方^{ほう}を振^ふり向^むきますと、それは、サボテンでありました。
 「あなたがたは、みんな熱^{あつ}い国^{くに}の生^うまれでしょう。だからそう思^{おも}いなされるんですけれ
 ど、わたしなどは、元^{がんらい}来^{らい}が野^の育^{そだ}ちなのですから、やはり風^{かぜ}に吹^ふかれたり、おりおりは、

雨あめにもさらされたほうが、しんみりいたしますわ。そして、わたしは、ちようや小ちいさはちが大好きだいすですの。」と、かわいらしい声こえを出だしていったものがあります。雪割草ゆきわりそうは、だれかと思おもつて、その方ほうを見ると、しゆる竹ちくの蔭かげから、うす紅あかいほおをして、桜草さくらそうが笑わらいながらいつているのでありました。

雪割草ゆきわりそうは、一目見ひとめみたときから、この桜草さくらそうが好きすになりました。

「あーあ。」と、このとき、だれやらが、怠たい屈くつまぎれにあくびをしていました。

雪割草ゆきわりそうは、桜草さくらそうのいったことに、同感どうかんしました。ガラス戸どをとおして、外そとに風かぜが、黒くろずんだ常磐木ときわぎを動かうごかしているのを見みては、早くこの息いきづまるような温室おんしつの中なかから、広々ひろひろとした外そとに出でたいものだと思おもっていました。

「外そとへ出でたいなどと、ほんとうにいやなこつた。俺おれは、今年ことしも傷痕きずあとが痛いたんで、ろくな花はなが咲さけそうでない。もう一年ねんこのままに、この室しつの中なかで眠ねむることになるだろう。外そとに出て、も、これよりかもっときれいな、気持きもちのいい室しつへゆかれるならいいが、それでなけりや、このまま眠ねむつていたほうが、どれほどいいかしれやしない。」と、そのとき、サボテンはいいました。

それから、わずかな間あいだに、みんなの上うへに思おもいがけない変かわったことが起おこりました。

あのようにおうへいにいつていたらんは、ある日貴婦人ひきふじんが店みせのものにつれられて、この温室おんしつに入はいつてきたときに、

「この花はなをきつてください。」といったので、店みせのものは、はさみで、らんの花はなを根ねもとからきつてしまいました。

らんは、また、来年らいねんでなければ、花はなが咲さかないのです。

その翌日よくじつ、洋服ようふくを着きた男おとこのひとが、やはり店みせのものといつしよに、この温室おんしつの中なかに入はいつてきました。

「かわいらしい、雪割草ゆきわりそうの花はなだな。これこれを届とどけてもらおうか。」といいました。そして、雪割草ゆきわりそうは、その日ひの午後ごご、この温室おんしつの中なかから、外そとに出だされたのです。

外そとは、風かぜが寒さむかった。しかし、雪割草ゆきわりそうの花はなは、これこれくらいこれくらいの風かぜに我慢がまんができないようなことはありませんでした。それに、空そらの色いろは、ほんとうにさえて、青あおく、青あおく、美うつくし

つたものでありましたから、かえつて、花はなは、外そとに出だされたことを喜よろこんでいました。

雪割草ゆきわりそうの花はなは、ある大おおきな家いえの窓まどの際きわに持もつてゆかれました。

「この花はなは、ここここに出だしておいてだいじようぶだろうか？」と、洋服ようふくを着きた主人しゅじんはい

「ええ、寒さには強いから、だいじようぶです。」と、植木屋は答えました。

「ああ、そして、明日、桜草を二鉢ばかりとどけてもらおうか。」と、洋服を着た主人がいました。

「かしこまりました。」と、植木屋は答えて帰ってゆきました。

雪割草は、あの温室から出たことを、すこしも悲しいとは、思いませんでしたけれど、ただ、あの、なつかしい桜草に別れたことが、名残惜しくて、ここにつれてこられる道すがら、桜草の姿を目に思い浮かべては、涙ぐんでいたのですが、明日は、ふたたびいっしょになれると聞いて、うれしくてなりませんでした。

ちようど、日が暮れかかるすこし前でした。一ぴきのみつばちがどこから飛んできて、花の上に止まりました。そのみつばちはなんとなく、痛々しそうに見えました。

「ほんとうに、こんなかわいらしい花が、こんなところに咲いているとは知らなかった。」と、みつばちは、びつくりしたようにいいました。

「私は、今日ここへきたばかりです。」と、雪割草は答えました。

「長い、寒い冬の間、私は、花を探して歩いていました。けれど、まだ、あなたのように、美しい、小さな花を見ませんでした。私は、寒さのために体が弱っています。私のうすい

羽は疲れています。私は、元気がありません。しかしこうして、太陽が暖かに照らして
 いますので、どんなにいまは気持ちがいいかしれません。どうかお願いですから、あなた
 の胸にあるみつをすわしてください。」といって、みつばちは、小さな花の上に止まりま
 した。

しばらくすると、みつばちは、じつに悲しそうな声で叫びました。

「ああ、あなたの胸はあんまり小さい。そして、私のもらうだけのみつはありません。」
 といって、悲しみました。

雪割草の花も、この言葉をきくと、なんとなくさびしさやら、哀れさに身ぶるいをし
 ました。

「そんなに、お悲しみなさいますな。明日になれば、やさしい、美しい桜草がくるは
 ずになっています。そうしたら、桜草に頼んで、みちをおもらいなさいまし。」と、
 雪割草の花はなぐさめました。

いじらしいみつばちは、雪割草のそばを離れかねて、じつとして体を太陽の光にぬ
 くめて葉の上に止まっていました。そのうちに、日は西の空に傾きました。常磐木の葉蔭
 から、赤い空の色が見られました。すると、みつばちは、彼に別れを告げて、いずこへと

なく飛んでいつてしまいました。

その晩は、雪割草は、雲切れのした空に輝く、星の光をなつかしげにながめることができました。そして、明日、桜草がくるのを楽しみにいたしていました。

その明るく日も、いいお天気でありました。日にまし、春が近づいてきました。庭の木々も元気づいて、空を飛んでゆく雲の影も希望に光っていました。はたして、なつかしい桜草はやってきました。二つの鉢が並んだとき、

「あなたは、ここへきておいでなされたのですか？」と、桜草は、ほおを紅くしていきました。

「私は、昨日から、あなたを待っていました。」と、雪割草は、桜草をながめました。そして、昨日は、かわいらしいみつばちのきたことを話しました。また、今日もくるであろうと思ったそのみつばちは、とうとうその日はきませんでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「福岡日日新聞」

1923（大正12）年1月1日

※表題は底本では、「みつばちのきた日《ひ》」となっています。

※初出時の表題は「蜜蜂の来た日」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年12月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

みつばちのきた日

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>